AMBASSADE DE FRANCE AU JAPON
Liberté Égalité Fraternité

INSTITUT FRANÇAIS 東京日仏学院 Tokyo

Liberté Créativité Diversité

生きものとともに

Agir pour le vivant

第11回

哲学のタベ

2025.5.30 (金) – 6.1 (日)

—— 展覧会期間 5.23 (金) – 6.15 (日)

東京日仏学院

Nuit de la Philo 2025

AGIR POUR LE VIVANT

YAU

ヴィラ VILLA KUJOYAMA 九条山

Fondation Bettencourt Schueller
Reconnue d'utilité publique depuis 1987

第11回 哲学の夕べ　Agir pour le vivant 生きものとともに

Nuit de la Philo 2025 ―Agir pour le vivant

アートとの刺激的な対話をとおして哲学にアプローチする「哲学の夕べ」。第11回を迎える今年は、フランス・アルルのフェスティバル「Agir pour le vivant」と協働します。
地球温暖化、社会格差や人々の分断、戦争…私たちは現在、数々の問題に直面しています。これらはいずれも、人間中心主義的な世界観に由来するといえるでしょう。本フェスティバルでは、人間以外の様々な存在とその循環―動物、植物、微生物、水、土壌、大気に至るまで―に目を向けます。そして中でも、あらゆる人為的境界を超えていくフレキシブルな可能性として「水」に注目します。世界に偏在し生命の源である水は、そもそもコモンズであり、エコロジーやフェミニズムへと連なっていく思考や実践の最前線といえるのです。
かつての「水都」江戸の中心部に位置する東京日仏学院は、周辺の水辺に加え、地下に豊かな水脈を擁しています。そのような水の存在を感じながら、本フェスティバルは、3週間の展示とともに、5月最後の週末に理論と実践を往還する日仏の研究者やアーティストを迎えた多彩なイベントを開催します。そこでは出演者、来場者が体験を共有し、森羅万象とともにエネルギーを交歓していく場が生まれることでしょう。

Rendez-vous incontournable de l'Institut français de Tokyo proposant un dialogue stimulant entre arts et philosophie, la Nuit de la Philo accueille pour sa 11e édition le festival arlésien Agir pour le vivant.

Changement climatique, conflits, asymétries diverses de la société… Nous sommes confrontés à de nombreux problèmes qui, d'une certaine manière, trouvent leur origine dans une vision du monde anthropocentrique. Ce festival cherche ainsi à déplacer nos regards, au-delà de l'Humain, sur les autres existences et leurs circulations respectives : animaux, végétaux, micro-organismes, eau, terre, jusqu'à l'air-même. En particulier l'eau, dont les potentialités transcendent toute intervention humaine. Source de vie inégalement répartie, l'eau est avant tout un bien commun au-devant des réflexions et actions tendant vers l'écologie et le féminisme.

L'Institut français de Tokyo se situe justement à la croisée des systèmes d'assainissement et d'approvisionnement en eau, un large dispositif de gestion des flux à Edo, autrefois connue sous le nom de « capitale des eaux ». S'appuyant sur l'existence de ce réseau de veines d'eau, la Nuit de la Philo vous convie à trois semaines d'expositions et un week-end de festival où chercheurs et artistes franco-japonais vous entraîneront dans un dialogue théorique et pratique dans lequel les intervenants et le public créeront ensemble un espace d'expression empreint de la vitalité de la Nature.

Agir pour le vivant は、2020年よりアルルで毎年開催されている、エコロジーを根幹に文化、社会や政治を横断するオルターナティブなフェスティバルです。複数の視点を提案することで、エコロジーと政治の本来の意味を取り戻すことを目指しています。それはつまり、共生の価値観を集団で定義し、すべての人が可能な限り尊重し合い協力しながら地球に住むことです。街なかの会場や領域横断的なイベントで注目を集め、近年は南米コロンビアとアフリカのカメルーンでも開催されています。

Agir pour le vivant est un festival alternatif visant à créer une plateforme de réflexions et d'actions clefs pour faire émerger une société du vivant via les arts et les sciences autour des questions environnementales. Multipliant les points de vue, l'évènement souhaite redonner à l'écologie et à la politique leur sens premier : celui de se donner collectivement les valeurs orientant le vivre ensemble, celui d'habiter la Terre de la manière la plus respectueuse et solidaire de toutes possible. Se tenant chaque année à Arles depuis 2020, le festival s'est ouvert à l'international avec des éditions réussies en Colombie et au Cameroun.

プログラム・キュレーター

Commissaire générale

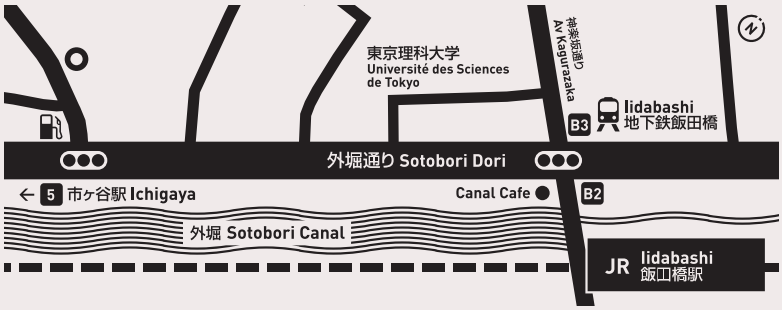
四方幸子
Yukiko SHIKATA

© Kenshu Shintsubo

キュレーター、批評家。十和田市現代美術館館長、美術評論家連盟会長、「対話と創造の森」アーティスティックディレクター。多摩美術大学・東京造形大学客員教授、武蔵野美術大学・情報科学芸術大学院大学（IAMAS）・京都芸術大学非常勤講師。「情報フロー」というアプローチから諸領域を横断する活動を展開。1990年代よりキヤノン・アートラボ）、森美術館、NTT ICC（いずれもキュレーター）と並行し、インディペンデントで先進的な展覧会やプロジェクトを多く実現。国内外の審査員を歴任。著書に『エコゾフィック・アート 自然・精神・社会をつなぐアート論』（2023）、共著多数。

東京日仏学院 IFT　Institut français de Tokyo

東京日仏学院は、フランス政府公式の語学学校・文化センターです。



〒162-8415　東京都新宿区市谷船河原町 15
15 Ichigaya-funagawara-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8415

instituttokyo　institut_tokyo　institut_tokyo

www.institutfrancais.jp/tokyo

詳細・ご予約はこちら

第 11 回「哲学の夕べ」
― Agir pour le vivant 生きものとともに

プログラム・キュレーター：四方幸子
主催：東京日仏学院
共催：Agir pour le vivant（アルル）
特別協力：ヴィラ九条山、ベタンクールシュエーラー財団、有楽町アートアーバニズム YAU、東京藝術大学
協力：武蔵野美術大学、アヴィニョン国立高等美術学校、
助成：アンスティチュ・フランセ パリ本部
広報デザイン：三ッ間菖子

Nuit de la Philo 2025 — Agir pour le vivant

Commissariat général : Yukiko Shikata
Organisation : Institut français de Tokyo
En partenariat avec : Agir pour le vivant
En collaboration avec : Villa Kujoyama, la Fondation Bettencourt Schueller, YAU – Yurakucho Art Urbanism, Université des Arts de Tokyo, Université d'art de Musashino, et École Supérieure d'Art d'Avignon
Avec le soutien de : Institut français
Graphismes : Shoko Mitsuma

プログラムは都合により変更されることがありますのでご了承ください。
変更のお知らせ、プログラムの詳細は東京日仏学院のウェブサイトをご覧ください。

Programme sous réserve de modifications.
Pour plus d'informations, consultez régulièrement notre site web.

展覧会 EXPOSITIONS

「センシング・ストリームズ〜生きものとともに」展

参加作家：石橋友也、大小島真木、藤倉麻子、細井美裕

EXPOSITION *SENSING STREAMS* avec Tomoya Ishibashi, Maki Ohkojima, Asako Fujikura et Miyu Hosoi

自然における流れ、動植物や微生物、人、人工物、データ…私たちの生きる世界にはさまざまなストリームズ（流れ）が存在し、それらが関係することで生成変化をし続けています。本展では、そのような流れを、とりわけ水や空気に注目し可視化・可聴化する作品を紹介します。作品に出会い、そして日仏学院の屋内外を散策してみてください。時間や空間を超えて偏在するものや非生物と見なされているものとの新たな関係が始まることでしょう。

会期：2025年5月23日㊎〜6月15日㊐

時間：火曜〜土曜：11時〜19時（日曜は17時まで）
月曜・祝日 休廊
※5/23㊎、5/30㊎、5/31㊏は21時まで開廊

会場：東京日仏学院　入場無料

石橋友也「Microscopique Poésie」（2025）

Tomoya Ishibashi, *Microscopique Poésie* (2025)　**会場：藤本館ホール**

Self Reference Microscope (2025)

川で拾ったゴミや自然物で顕微鏡を自作し、その川の水を観察する《Self-reference Microscope》に、東京日仏学院の近くを流れる神田川の上流で採集した素材による新作《神田上水顕微鏡》と、神田川にゆかりのある松尾芭蕉の句を学習したAIが顕微鏡観察画像をもとに生成した俳句で構成。人新世の東京を起点に、環境、生物学、詩、歴史、科学技術がアートを通して交差する。自然に分け入りながらも自然を対象化し、そこに詩を生成させていく石橋は、自己言及的な観察者かつ詩人であり、「Microscopique Poésie」を体現している。

[展示作品]《Self-reference Microscope》(2025) ／ "Self-reference Microscope" (2025) 助成：令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業《神田上水顕微鏡》(新作) ／ "Kanda-Josui Microscope"(New Work)《群れ遊ぶ影の無言や夏の月》(2025) ／ "Summer moon, silent shadows gather and play" (New Work) (新作)：新倉健人との共同制作

大小島真木「根源的不能性」（2023/2025）

Maki Okojima, *Radical Impotency* (2023/2025)　**会場：リヴ・ドロワット**

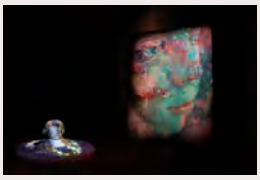


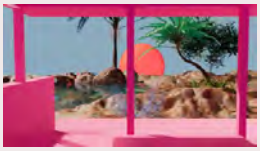
Photo Akimi Ota

大小島真木と辻陽介は、2022年長野県諏訪での滞在調査後、同地の神話、信仰、民俗などに触発され、性愛、捕食、屠殺、葬送という生命の営為がもつ両義性を創作神話とした初の映像作品『千鹿頭 CHIKATO』(2023) を制作した。狩猟神ともされる古代諏訪の「千鹿頭神」に由来する映像では、水源の老人と森の精、森の民と巫女、旅人と謎の女、人と鹿など人間と非人間をつなぐ複数の物語が展開する（大小島と辻は、本作を機にユニット「大小島真木」へと変態）。映像、絵画、陶器、テキストなど多様なメディアで構成された本インスタレーションは、『千鹿頭 CHIKATO』の背景とコンセプト―彼らが「根源的な不能性（Radical Impotency）」と呼ぶ、日本列島が背負ってきた精神性―を充満させている。「災害列島で暮らしてきた民が、自然の猛威を前に抱いてきた無力感、「何もしえなさ」」（大小島真木／ユニット）はしかし、作品に散りばめられた「胞衣（えな）」のモチーフによって「再生」への祈りを内包する。
協力：対話と創造の森

5/31にエスパス・イマージュで『千鹿頭 CHIKATO』の上映あり

藤倉麻子、大村高広「手前の崖のバンプールの記録」（2022-2025）

Asako Fujikura, Takahiro Ohmura
***The Record of Vanpool over the cliff in the foreground* (2022-2025)**　**会場：坂倉館ホール**


© Asako Fujikura, Takahiro Ohmura

藤倉は、都市や郊外、そして自然など人為的に開発された環境や物理的なインフラ、通常殺伐とした風景と見なされる場所、浅瀬など陸と水の関係が常に変動する境界領域やそこに生息する生物、開発の歴史などに興味を抱き3DCG映像やオブジェによるインスタレーションを発表してきた。物理的な構造物や仮想の存在がヴィヴィッドな色彩で登場し現れ（まるで意志を持つ存在のように）、風景が独自のアングルやパン、構成で展開する映像、仮想空間から抜け出たかのようなオブジェたちは、藤倉ならではのシュールな世界として確立している。本インスタレーションでは、数年来水への興味を持ち制作してきた藤倉が、以下の作品における水に関する要素を抽出し、新たなハイブリッドとして披露する。2022年に東京湾で開催したプロジェクト「手前の崖のバンプール」（大村高広らとの共作）の記録および関連映像（2022）、《砂地の運びタイヤ》（2022）。

細井美裕《Living Room》（新作）

Miyu Hosoi, *Living Room* (création)

会場：坂倉塔

Photo So Mitsuya

坂倉準三による坂倉館（1951）、10年後の増築、そして約60年後の藤本壮介による増築が中庭を囲んでいる。都心ながら自然が豊かなこの場所は、屋内外を階段やスロープがなだらかに結び、歩けば多様な景色とともに風や木々や鳥、電車音など様々な流れが体感できる。坂倉館の二重螺旋階段から構想された本作では、独立しつつ絡み合う二つの螺旋空間の流れに加え、螺旋階段と外の流れが出会う。自然音が二重螺旋空間へ、自然の中に二重螺旋空間の音が流出し、自然と人工、意識と無意識の境目がほぐれていく。人間は世界を見聞きしているが、世界から見られ聞かれている。本作では、訪れた者もその一部となり内耳の螺旋へ音を受け入れていく。自然に見られる螺旋の流れ、森羅万象の生成原理がつながり、私たちは世界そして自らがLiving Room（生きた空間）であることを発見する。
機材協力：株式会社ATL-KYOEI

ノエル・ピカペール「野良展示 0.0 –MOHITORI パビリオン–」展

EXPOSITION *NOMADE 0.0 – PAVILLON MOHITORI* – par Noël Picaper

フランスのアーティストレジデンスヴィラ九条山（京都）と、有楽町アートアーバニズムYAUとのパートナシッププログラムとして、東京・大手町のホトリア広場にて建築家・ノエル・ピカペールのパビリオン展示を実施。2024年にヴィラ九条山に滞在したノエル・ピカペールは、YAUのサポートのもと、東京でのリサーチを行った。そこでは日本の伝統的な建材である「焼杉」の技術など、日本において建築と火の間に存在する関係を探求した。本展覧会では東京藝術大学主催の野良展示とも連携し、大手町・丸の内・有楽町のエリアの重なりと、水の巡り、そして雨樋や階段、屋根といった日常の建築のかけらとの対話を紡ぐ装置として、小規模な建築物『野良展示0.0–MOHITORIパビリオン–』を構想。親密なスケールの中にたたずみながら、都市と自然のあいだに流れる気配を、行き交う人々にそっと問いかけるパビリオンが屋外展示される。

© Noël Picaper

「MOHITORI」プロジェクト紹介展

模型やパネル、デッサン等で「MOHITORI」プロジェクトを紹介する展示が、東京日仏学院で同時開催。

会期：2025年5月30日㊎〜6月末

会場：ホトリア広場（東京都千代田区大手町1-1-1）

時間：会期中は自由に観覧可能、入場無料
※内部見学は、スタッフがいる時のみ
※東京日仏学院でのプロジェクト紹介展は5月23日〜6月15日

設計：ノエル・ピカペール/Onomiau
企画：ヴィラ九条山、アンスティチュ・フランセ、ベタンクール・シュラー財団の有楽町アートアーバニズムYAU、東京藝術大学
設計・制作協力：蘆田暢人建築設計事務所
制作：松本家具製作所　協力：三菱地所
このプロジェクトは、ヴィラ九条山のポスト・レジデンス・プログラムとして実施されており、アンスティチュ・フランセパリ本部、アンスティチュ・フランセ、ベタンクールシュエーラー財団の支援を受けています。

プログラム PROGRAMME

5月30日㊎ Vendredi 30 mai

エスパス・イマージュ Espace images	17:00〜18:30	上映会・アフタートーク　オリヴィエ・デュビュコワ監督『不屈の人々』 Projection du film *Irréductibles* et rencontre avec son réalisateur, Olivier Dubuquoy
	19:00〜19:45	ライブ・パフォーマンス 青柳菜摘＋鈴木ヒラク「生体放送」 Performance live : *Living Transmission* de Natsumi Aoyagi et Hiraku Suzuki
ホール Hall	20:00〜22:00	オープニング・トーク、レセプション Conférence d'ouverture et réception

5月31日㊏ Samedi 31 mai

エスパス・イマージュ Espace images	10:00〜11:30	上映会・アフタートーク　大小島真木＋辻陽介『千鹿頭 CHIKATO』 Projection du film *Chikato* et rencontre avec Maki Ohkojima et Yosuke Tsuji
	12:30〜13:30	アーティスト・トーク　ノエル・ピカペール、森純平、大村高広（司会） Rencontre entre Noël Picaper et Junpei Mori, modérée par Takahiro Ohmura
	14:00〜15:30	鼎談「自然の中の私たち、私たちの中の自然」 シャルレーヌ・デコロンジュ、唐澤太輔、結城正美（進行） Table ronde *La nature autour de nous et en nous* avec Charlène Descollonges et Taisuke Karasawa, modérée par Masami Yuki
	16:30〜18:00	鼎談「精神としてのエネルギー」 太田光海、ジャン＝ルイ・トルナトレ、石倉敏明（進行） Table ronde *L'énergie comme spiritualité* avec Akimi Ota et Jean-Louis Tornatore, modérée par Toshiaki Ishikura
	19:00〜21:00	対談「生きものとともに」　フレデリック・アイ＝トゥアティ、奥野克巳（進行） ライブパフォーマンス「予兆プレザージュ」　大石将弘（朗読） Rencontre entre Frédérique Aït-Touati et Katsumi Okuno　Performance *Présages* avec Masahiro Oishi
中庭、他 Jardin	10:00〜12:00	子どものためのワークショップ「環境を演奏する」大村高広（講師） Atelier pour enfants *Jouer l'environnement* avec Takahiro Ohmura
	12:00〜14:00	料理パフォーマンス「つつんで、はさんで、むすんで」ソウダルア、太田旭 Performance culinaire *Envelopper, Insérer et Assembler* de Rua Soda et Asahi Ota
	13:00〜13:30	ランチ・カンファレンス ソウダルア、太田旭、占部まり（司会） Déjeuner-conférence avec Rua Soda, Asahi Ota et Mari Urabe

6月1日㊐ Dimanche 1er juin

エスパス・イマージュ Espace images	10:30〜11:45	上映会　フレデリック・アイ＝トゥアティ、ブルーノ・ラトゥール『Moving Earths』 Projection de la lecture-performance *Moving Earths* de Frédérique Aït-Touati et Bruno Latour
	14:00〜15:30	鼎談「コモンズとしての社会」卯城竜太、フレデリック・アイ＝トゥアティ、四方幸子（進行） Table ronde *La société en tant que bien commun* avec Ryuta Ushiro et Frédérique Aït-Touati, modérée par Yukiko Shikata
	16:30〜18:00	鼎談「科学を超える“科学”へ」ドミニク・チェン、アレクサンドル・モナン、原島大輔（進行） Table ronde *Les sciences au-delà de la "Science"* avec Dominique Chen, Alexandre Monnin, modérée par Daisuke Harashima
	18:00〜19:00	クロージング・カンバセーション「新たなエコゾフィーに向けて」 Séance de clôture *Vers une nouvelle écosophie*
カンファレンスルーム (F111/F112) Salle de conférence (F111/F112)	10:00〜11:30	講演会・ワークショップ「議論すべき領域」オリヴィエ・デュビュコワ Atelier et rencontre *Zone à débattre* avec Olivier Dubuquoy
中庭、他 Jardin	12:00〜14:00	料理パフォーマンス「つつんで、はさんで、むすんで」ソウダルア、太田旭 Performance culinaire *Envelopper, Insérer et Assembler* de Rua Soda et Asahi Ota
	12:00 / 13:20	ダンス・パフォーマンス　小暮香帆 Performance de danse déambulatoire de Kaho Kogure

5月30日㊎のプログラム　Vendredi 30 mai

17:00〜18:30　エスパス・イマージュ　Espace images

映画上映　オリヴィエ・デュビュコワ監督「不屈の人々」
Projection du film *Irréductibles* et rencontre avec son réalisateur, Olivier Dubuquoy

※上映後に監督によるアフタートークあり　予約：500円　Réservation : 500yens

「不屈の人々」*Irréductibles*
（2020年／フランス／50分／カラー／デジタル／日本語字幕付）
フランス全土で、土地、未来、そして人生に対するある思想のために、女たちや男たちが勇気を出して行動を起こしている。闘う運命ではなかったにもかかわらず、彼らは憤りを行動に移し、最初から負けが決まっていたと思われた環境問題の闘いに勝利した。原子力発電所の阻止、海洋汚染を食い止めるための破壊工作、森林を守るための占拠。本作は、実を結んでいる市民の抵抗を感動的に描く。

19:00〜19:45　エスパス・イマージュ　Espace images

ライブ・パフォーマンス　青柳菜摘＋鈴木ヒラク「生体放送」
Performance live : *Living Transmission* de Natsumi Aoyagi et Hiraku Suzuki

予約：1,000円　Réservation : 1000yens

© Hiraku Suzuki Studio

東京日仏学院では多様な植物が生き、鳥や猫が訪れ風がさまざまなものを運んできます。人が感知し得ないものも含め、世界は生起しつづけているのです。坂を上り、辺りを遊歩する青柳は声そして即興詩として会場へ「放送」します。それを受信する鈴木はドローイングで応答し、光に変換します。やがて両者は出会い、生のセッションへと移行します。青柳と鈴木による初コラボレーション。

20:00〜22:00　ホール（坂倉館）　Hall Sakakura

オープニングトークとレセプション
Conférence d'ouverture et réception

参加無料　Entrée libre

フェスティバルの開幕を祝い、参加アーティストや登壇者との交流会を開催します。
どなたでもご参加いただけます。

5月31日㊏のプログラム　Samedi 31 mai

10:00〜11:30　エスパス・イマージュ　Espace images

映画上映　大小島真木＋辻陽介監督「千鹿頭 CHIKATO」
Projection du film *Chikato* et rencontre avec Maki Ohkojima et Yosuke Tsuji

※上映後にアーティストによるアフタートークあり（日本語のみ）　予約：1,000円　Réservation : 1000yens

© Jun Yamanobe

千鹿頭 CHIKATO
（2023年／日本／40分／カラー／デジタル）
長野県諏訪地方での滞在調査を経て、同地の神話、信仰、民俗などから得たインスピレーションをもとに、性愛、捕食、屠殺、葬送といった生命の普遍的営為がもつ両義性を創作神話とした映像作品。タイトルは、狩猟神ともされる古代諏訪の「千鹿頭神」に由来するが、本作では、その地にかつていた神々や人々、あるいは森の総称としている。森の中で複数の物語が、相互に比喩的な関係を織りなしていく。
協力：対話と創造の森

10:00〜12:00　東京日仏学院　敷地内　Jardin

子どものためのワークショップ「環境を演奏する」
監修・ファシリテーター：大村高広
Atelier pour enfants *Jouer l'environnement* avec Takahiro Ohmura

対象 6歳〜12歳　定員12名　使用言語：日本語　En japonais uniquement
予約：1,000円　Réservation : 1000yens

© Yurika Kono

新旧の建物を取り囲む環境の中を立体的な散歩道（プロムナード）が結ぶ敷地をめぐり、自分が見つけたポイントで音を出し、即興のアンサンブルを楽しみます。それぞれが「楽器」となり、ランドスケープの豊かさを遊びながら体感する試みです。

12:00〜14:00　中庭テラス　Jardin (terrasse)

料理パフォーマンス〜ランチ・ビュッフェ「つつんで、はさんで、むすんで」
アーティスト：ソウダルア、太田旭
Performance culinaire *Envelopper, Insérer et Assembler* de Rua Soda et Asahi Ota

予約：2,500円　Réservation : 2500yens

日本の季節の素材、そしてフランスをはじめとしたさまざまな国の料理を、和紙の上にソースとともに並べ「描き出す」ことで食卓が作られていきます。お米やパンでつつんで、はさんで、むすんで召し上がっていただきます。「水」、そして水により育まれる「土」、そこから生まれる素材。国境や文化を越えてつながるオリジナルの精進料理をお楽しみください。
協力：増田園

13:00〜13:30　中庭テラス　Jardin (terrasse)

ランチ・カンファレンス
登壇：占部まり、ソウダルア、太田旭
Déjeuner-conférence avec Rua Soda, Asahi Ota et Mari Urabe

無料・予約不要　Entrée libre ; en japonais uniquement

「社会的共通資本」を提唱した経済学者 宇沢弘文の意思を引き継ぐ占部まりを迎え、中庭でトークを開催します。

12:30〜13:30　エスパス・イマージュ　Espace images

アーティストトーク
登壇：ノエル・ピカペール、森純平　司会：大村高広
Rencontre entre Noël Picaper et Junpei Mori, modérée par Takahiro Ohmura

無料・要予約　Gratuit, réservation obligatoire

© Noël Picaper

有楽町アートアーバニズムYAUとヴィラ九条山とのパートナーシッププログラムとして、ヴィラ九条山レジデントのノエル・ピカペール（2024年度、建築）が、大手町・丸の内・有楽町のエリアにパビリオンを設計しました。本プロジェクトを紹介するトークを開催します。
協力：ヴィラ九条山、ベタンクールシュエーラー財団、有楽町アートアーバニズムYAU、東京藝術大学、蘆田暢人建築設計事務所、松本家具製作所、三菱地所

14:00〜15:30　エスパス・イマージュ　Espace images

鼎談「自然の中の私たち、私たちの中の自然」
登壇：シャルレーヌ・デコロンジュ（オンライン）、唐澤太輔　進行：結城正美
Table ronde *La nature autour de nous et en nous*
avec Charlène Descollonges et Taisuke Karasawa, modérée par Masami Yuki

予約：500円　Réservation : 500yens

近代以降の世界規模の開発そして自然の搾取は、深刻な環境汚染と気候変動を引き起こしたばかりでなく、その影響は私たちの心身にまで及んでいると言えるでしょう。私たち人間は自然の一部でありながら、自然を対象化できる唯一の存在です。このセッションでは、私たちが自然とともに生きることの大切さを確認し、人間以外の存在や自然環境とのつながりを取り戻すと同時に、自分自身の内なる自然と向き合っていく可能性を話し合います。

16:30〜18:00　エスパス・イマージュ　Espace images

鼎談「精神としてのエネルギー」
登壇：太田光海、ジャン＝ルイ・トルナトール（オンライン）　進行：石倉敏明
Table ronde *L'énergie comme spiritualité*
avec Akimi Ota et Jean-Louis Tornatore, modérée par Toshiaki Ishikura

予約：500円　Réservation : 500yens

社会は、知識や財の所有・蓄積を志向する近代的な西洋の方法論を基盤として発展してきました。そのような中、科学技術の進歩とともに、歴史や文化を多元性の視点から見直す試みが各方面で進められています。本セッションでは、万物を資源＝エネルギーとして搾取してきた人間中心的な視点とは距離を置き、万物に神を見出し自然や人工物と共生してきた日本ならでは視点から、「精神」としてのエネルギーを検討します。

19:00〜21:00　エスパス・イマージュ　Espace images

対談「生きものとともに」
登壇：フレデリック・アイ＝トゥアティ、奥野克巳
Rencontre entre Frédérique Aït-Touati et Katsumi Okuno

ライブパフォーマンス「Présages 予兆」
Performance *Présages* avec Masahiro Oishi

予約：1,000円　Réservation : 1000yens ; Performance en japonais

© Zone Critique, Hicham Berrada

「Présages 予兆」
作・テキスト：フレデリック・アイ＝トゥアティ、エマヌエーレ・コッチャ、ダンカン・エヴヌー
映像：イシャム・ベラダ
サウンド：マヤ・ボケ、シモン・ギャレット
朗読：大石将弘
テキスト翻訳：松葉類
2023年パリのブルス・ドゥ・コメルスで行われたライブパフォーマンスの日本語バージョンを特別上演します。「3つの物語をみなさんに語りながら、そしてわたしたち全員を水のなかの風景に沈殿させながら、語り部、弁士という失われた芸をふたたび蘇らせたいのです」。

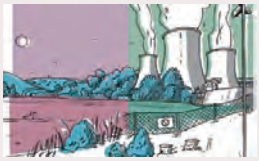
6月1日㊐のプログラム　Dimanche 1er juin

10:00〜11:30　カンファレンスルーム　Salle de conférence (F111/F112)

講演会とワークショップ「議論すべき領域」
講師：オリヴィエ・デュビュコワ
Atelier et rencontre *Zone à débattre* avec Olivier Dubuquoy

予約：500円　Réservation : 500yens

近所で樹齢100年の木が伐採されようとしている。あなたの地域の水道が民営化されようとしている。隣町に原子力発電所が建設されようとしている。あなたは賛成ですか、反対ですか？この3つのプロジェクトについて、農家や金融業者の立場から、カードゲームをしながら議論してみませんか。さまざまな議論を参加者に促すこのカードゲームを作るきっかけとなった経緯を、オリヴィエ・デュビュコワが紹介します。



10:30〜11:45　エスパス・イマージュ　Espace images

上映　フレデリック・アイ＝トゥアティ、ブルーノ・ラトゥール「Moving Earths」
Projection de la lecture-performance *Moving Earths* de Frédérique Aït-Touati et Bruno Latour

予約：1,000円　Réservation : 1000yens

「Moving Earths」
（2019年／フランス／75分／カラー／デジタル／日本語同時通訳付））
フレデリック・アイ＝トゥアティとブルーノ・ラトゥール共作のレクチャー・パフォーマンスの記録上映。地球から月へ、そして月から地球へ。天文革命の時代と現代がパラレルであるという仮説を検証する。私たちは今、ガリレオの時代のような深遠で急進的な世界変革の只中にいるのだろうか？ひとつ確かなことは、私たちはもはや自分たちが住んでいる惑星が何なのか、それをどう表現すればいいのか、正確にはわからないということだ。私たちの目の前には、安定したひとつの地球ではなく複数の地球があり、どの地球に降り立つべきかを知るために、探索しなければならない。

© Zone Critique

12:00〜14:00　中庭テラス　Jardin (terrasse)

料理パフォーマンス〜ランチ・ビュッフェ「つつんで、はさんで、むすんで」
アーティスト：ソウダルア、太田旭
Performance culinaire *Envelopper, Insérer et Assembler* de Rua Soda et Asahi Ota

予約：2,500円　Réservation : 2500yens　5月31日㊏の紹介をご覧ください

12:00/13:20　中庭、他

小暮香帆によるダンス・パフォーマンス
Performance de danse déambulatoire de Kaho Kogure

無料・予約不要　Entrée libre
※それぞれ15分程度を予定しています
Deux performances d' environ 15min
中庭を囲む敷地内を巡り、環境的要素に呼応しながら繰り広げられる即興のダンス・パフォーマンス。同時開催の料理のパフォーマンスとのコラボレーションもあり。ダンスはどなたでもご覧いただけます。

© Chikashi Kasai

14:00〜15:30　エスパス・イマージュ　Espace images

鼎談「コモンズとしての社会」
登壇者：卯城竜太、フレデリック・アイ＝トゥアティ　進行：四方幸子
Table ronde *La société en tant que bien commun*
avec Ryuta Ushiro et Frédérique Aït-Touati, modérée par Yukiko Shikata

予約：500円　Réservation : 500yens

科学技術の発展と普及は、便利で効率的な生活を私たちにもたらしました。しかしその一方で、環境破壊や社会格差、人々の分断がかつてないほど進行しています。本セッションでは、人間だけでなく人間以外も含めた「コモンズ」の視点から、民主主義の可能性を検討します。加えて本フェスティバルの基層である「水」をコモンズを象徴し拡張するものとして取り上げます。

© Chim↑Pom

16:30〜18:00　エスパス・イマージュ　Espace images

鼎談「科学を超える“科学”へ」
登壇者：ドミニク・チェン、アレクサンドル・モナン（オンライン）　進行：原島大輔
Table ronde *Les sciences au-delà de la “Science”*
avec Dominique Chen et Alexandre Monnin, modérée par Daisuke Harashima

予約：500円　Réservation : 500yens

科学は、人々の便利で豊かな生活のために近代以降飛躍的な進展を遂げました。しかし今世紀に生まれた「人新世」という状況に顕著なように、科学はもはや万能ではなく、憂慮すべき状況を人間や人間以外の存在にもたらしています。現在「科学」と呼ばれるものは西洋近代そして資本主義を基盤にしたものであり、見渡せば異なる地域や時代において、さまざまなかたちの科学が営まれていました。本セッションでは、日本や東アジアの叡智を紹介しながら科学の多様性について検討します。

© Aichi Triennale 2019

18:00〜19:00　エスパス・イマージュ　Espace images

クロージング・カンバセーション「新たなエコゾフィーに向けて」
Séance de clôture *Vers une nouvelle écosophie*

無料・予約不要　Entrée libre

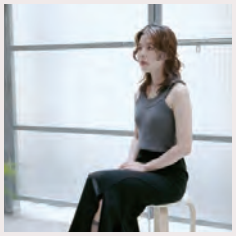
豊かな討論とアートイベントに満ちた3日間のフェスティバルの締めくくりとして、プログラム・キュレーターの四方幸子と、フランスの「Agir pour le vivant」フェスティバルのカタリナ・メサ、アガタ・ルディエを迎え、クロージングトークを行います。

詳細・ご予約はこちら

アーティスト・登壇者

INTERVENANTS & ARTISTES

藤倉麻子
Asako FUJIKURA



1992年生まれ。都市・郊外を横断的に整備するインフラストラクチャーやそれらに付属する風景の奥行きに注目し、主に3DCGアニメーションの手法を用いた作品を制作。近年では、埋立地で日々繰り広げられている物流のダイナミズムと都市における庭の出現に注目した空間表現を展開している。近年の展覧会に「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート」（森美術館、2025）、第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示「IN-BETWEEN（中立点）—生成AIと未来」（2025）などがある。

細井美裕
Miyu HOSOI

© So Mitsuya

1993年生まれ。多重録音作品のほか、マルチチャンネル音響をもちいたサウンドインスタレーションや舞台作品など、空間の認識や状況を変容させる音に焦点を当てた制作を行う。これまでの展示に長野県立美術館、愛知県芸術劇場、日比谷公園、ロームシアター京都、国際音響学会、NTTインターコミュニケーション・センター［ICC］、山口情報芸術センター［YCAM］など。2025年IRCAM（フランス国立音響研究所）、バービカン・センター（ロンドン）にて作品を発表。

石橋友也
Tomoya ISHIBASHI

1990年埼玉県生まれ。大学では生物学を学ぶ。品種改良種、文字、人工知能などへの関心に基づき、自然と人為の境界を探索する芸術実践を行う。近年は、生家の周辺である荒川流域のリサーチに基づいた制作を展開。2012年より早稲田大学生命美学プラットフォーム「metaPhorest」に所属。2023年IAMAS博士後期課程入学。近年参加した展示に「IAMAS ARTIST FILE #10 繭／ COCOON:技術から思考するエコロジー」（岐阜県美術館, 2025）、「遍在、不死、メタモルフォーゼ」（京都瑞雲庵, 2024）、「DISTANT VIEW」（Mars Frankfurt, 2024）など。

大小島真木
Maki OHKOJIMA

©Aki Kawakami

「絡まり、もつれ、ほころびながら、いびつに循環していく生命」をテーマに活動する大小島真木、辻陽介によるアートユニット（2023年-）。大小島は1987年東京都生まれの現代美術家。インド、ポーランド、中国、メキシコ、フランスなどで滞在制作、2017年にはTara Ocean 財団が率いる科学探査船タラ号太平洋プロジェクトに参加。美術館、ギャラリーなどでの展示に加え、近年は舞台美術も手掛ける。辻は1983年東京都生まれ。編集者、文筆家として雑誌『STUDIO VOICE』他、様々なメディアに関わる。文化の土壌を耕すウェブメディア《DOZiNE》主宰。

フレデリック・アイ＝トゥアティ
Frédérique AÏT-TOUATI

演出家、科学史家。フランス国立科学研究センター（CNRS）研究員として、科学、芸術、政治の関係性に関心を持つ。著書に「Contes de la Lune」（2011）、「Terra Forma」（2019）、「Trilogie Terrestre」（2022）、「Théâtres du monde」（2024）等がある。ナンテール＝アマンディエ劇場、ベルリン芸術祭、ニューヨークCrossing the Linesフェスティバル、ブリュッセル・カイテアター、マルセイユ国立劇場ラ・クリエ、ポンピドゥー・センター、オデオン劇場で作品を上演。シャイヨー国立劇場のレジデント・アーティスト、トゥール国立劇場のアソシエート・アーティスト。

ドミニク・チェン
Dominique CHEN

© Rakutaro Ogiwara

博士（学際情報学／東京大学）。NTT ICC研究員、（株）ディヴィデュアル共同創業者を経て早稲田大学文学学術院教授。UCLA卒業後、NPOクリエイティブ・コモンズ・ジャパン（現・コモンスフィア）を設立。「トランスレーションズ展―「わかりあえなさ」をわかりあおう」（21_21 DESIGN SIGHT、2020/2021）展示ディレクター、グッドデザイン賞審査員、糠床発酵ロボット「Nukabot」研究開発、遺言執筆プロセスを集めたインスタレーション「Last Words / TypeTrace」（遠藤拓己とのdividual inc. 名義）などを通じ、テクノロジーと人間、自然存在の関係性を研究。

オリヴィエ・デュビュコワ
Olivier DUBUQUOY

作家、映画監督、地理学博士。環境汚染産業に対する抗議運動で数々の成功を収める。赤泥公害を告発した映画『Zone Rouge』を共同監督し、国際ドキュメンタリー映画祭「FIGRA」で審査員特別賞を受賞。国際的に放映された最新作『不屈の人々（Irréductibles）』は、成果を出した市民の抵抗を感動的に描いている。現在、2026年出版予定の2冊のグラフィック・ノベルを執筆中。

石倉敏明
Toshiaki ISHIKURA

1974 年東京都生まれ、秋田県在住。人類学者、秋田公立美術大学准教授。比較神話学や非人間種のイメージを巡る芸術人類学的研究を行う。第 58 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館展示「Cosmo-Eggs 宇宙の卵」など、アーティストとの作品協働制作にも参加。共著に『野生めぐり 列島神話の源流に触れる 12 の旅』（2015）、『Lexicon 現代人類学』（2018）、『モア・ザン・ヒューマン　マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』（2028）、『〈動物をえがく〉人類学 人はなぜ動物にひかれるのか』（2024）など。国際芸術祭あいち 2025 キュレトリアルアドバイザー。

小暮香帆
Kaho KOGURE

© Yuka Uesawa

ダンサー、振付家。6歳より踊り始める。舞台、音楽フェス、メディアなど様々な領域で動きの美学を展開。即興から身体への新たなアプローチを探り、振り付け、表現する。ソロでは3カ国9都市で作品を発表。振付・演出家作品への出演や海外ツアーへの参加多数。近年ではFESTIVAL De FRUE2024、映画、CM、MVへの振り付け出演、写真展 「second hand」、”beautiful people 2023 S/S” パリコレクションへの出演、またワークショップの講師も務める。

ノエル・ピカペール
Noël PICAPER

©Onomiau

建築家。2024年ヴィラ九条山レジデント。2016年、ストラスブール国立高等建築学院を卒業。スイス、日本とフランスで経験を積んだ後、2019年に建築事務所《Onomiau》を設立。公共空間に設置される東屋、民間プロジェクトの設計監理、都市・景観設計、展覧会、教育、フィクションなど、様々な分野の間を行き来している。

青柳菜摘
Natsumi AOYAGI

アーティスト、詩人。1990年東京都生まれ。映像メディアを用いた同時代芸術のアーティストとして、フィールドワークやリサーチをもとに、プロジェクトベースに主題を立て作品を発表している。近年の活動に個展「亡船記」（十和田市現代美術館, 2022）、国立女性美術館 日本委員会［NMWA Japan］第 7 回「Women to Watch」候補に選出（2022）、「ICC アニュアル 2024 とても近い遠さ」展（NTTインターコミュニケーション・センター [ICC], 2024）など。詩集『そだつのをやめる』（thoasa, 2022）が第28回中原中也賞受賞。コ本や honkbooks主宰。

シャルレーヌ・デコロンジュ
Charlène DESCOLLONGES

ハイドロロジスト（水文学）。フランス・アレス国立高等鉱業学校に学ぶ。地方自治体の水資源共有、戦略的管理、水ガバナンスに関する研究を主導。現在はコンサルタントとして、企業や地域関係者と協働し、2022年には「Pour une Hydrologie Régénérative（再生可能な水文学のために、の意）」協会を共同設立。講演や執筆にも力を注いでいる。

原島大輔
Daisuke HARASHIMA

基礎情報学、表象文化論。立教大学現代心理学部映像身体学科助教。共著にCybernetics for the 21st Century vol. 1 (2024)、『未来社会と「意味」の境界』（2023）、『メディア論の冒険者たち』（2023）、『クリティカル・ワード メディア論』（2021）、『AI時代の「自律性」』（2019）、『基礎情報学のフロンティア』（2018）など。『美術手帖』『思想』『現代思想、『ユリイカ』などに論考を寄稿。訳書にユク・ホイ『再帰性と偶然性』（2022）、ティム・インゴルド『生きていること』（2021）。

唐澤太輔
Taisuke KARASAWA

1978 年兵庫県神戸市生まれ。哲学、文化人類学。2002 年慶応義塾大学文学部卒業。2012 年早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程修了（博士〔学術〕）。第 1 回南方熊楠研究奨励事業助成研究者。日本学術振興会特別研究員、早稲田大学社会科学総合学術院助手、助教などを経て、現在秋田公立美術大学アーツ & ルーツ専攻ならびに大学院複合芸術研究科准教授。知の巨人・南方熊楠（1867-1941）に関する著作を多数執筆。近年は、南方が研究していた粘菌（真正粘菌・変形菌）を調査し論文等を発表、また粘菌をモチーフとしたアート作品の制作にもチャレンジしている。

アレクサンドル・モナン
Alexandre MONNIN

© Dorian Prost

パリ第1大学（パンテオン・ソルボンヌ）で哲学の博士号を取得。ESCクレルモンビジネススクールでリヨンのデザイン学校Strateと共同で「人新世のための戦略とデザイン」修士課程を指導し、特に「シフト・プロジェクト」に携わる。ウェブの哲学に関する論文を執筆後、エコロジカル・リダイレクト運動を共同で立ち上げる。最新の著書では「放棄の政治学」について考察している。その他著書に「スマートフォンのエコロジー」や「Héritage et fermeture（遺産と終結：解体のエコロジー）」等がある。

森純平
Junpei MORI

1985年マレーシア生まれ。東京藝術大学建築科大学院修了。在学時より建築から時間を考え続け、舞台美術、展示、まちづくり等、状況を生み出す現場に身を置きつづける。2013年より千葉県松戸を拠点にアーティスト・イン・レジデンス「PARADISE AIR」を設立。今まで600組以上のアーティストが街に滞在している。主な活動にMADLABO（-2011）、遠野オフキャンパス、遠野南部曲がり屋千葉家改修中（2015-）、ラーニングをテーマとした「八戸市新美術館設計案（共同設計：西澤徹夫、浅子佳英）」(2017-)、東京藝術大学芸術未来研究場特任准教授（2024-）。たいけん美じゅつVIVA（2019-）、有楽町アートアーバニズムYAU（2021-）等。株式会社インテロバング（2019）。

大石将弘
Masahiro OISHI

俳優。奈良県出身。ままごと、ナイロン100℃に所属。演劇作品への参加を中心に活動。近年の舞台出演作に、滋企画『ガラスの動物園』、ナイロン100℃『Don't freak out』、新国立劇場『私の一ヶ月』、ピンク・リバティ『みわこまとめ』、木ノ下歌舞伎『義経千本桜―渡海屋・大物浦―』、ゆうめい『娘』、夏の日の本谷有希子『本当の旅』など。Eテレ『100分de名著「ねじまき鳥クロニクル」』や、久留米シティプラザ『ひらたい古典』、紛争地域から生まれた演劇『亡霊の地』など朗読での出演も多い。劇場の外で展開する演劇のプロジェクトにも携わりながら、学校や福祉施設での演劇ワークショップを継続的に行うなど活動は多岐にわたる。

太田光海
Akimi OTA

© Jun Yokoyama

1989年東京都生まれ。映像作家、人類学者。神戸大学国際文化学部、パリ社会科学高等研究院（EHESS）人類学修士課程を経て、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センターにて博士号を取得。アマゾン熱帯雨林のシュアール族の村に1年間滞在し撮影した初監督作品『カナルタ　螺旋状の夢』を2021年に全国公開。また映像、写真、サウンドを用いた作品により、個展「Wakan / Soul Is Film」（The 5th Floor）や「Alive in Dreams」（BnA Alter Museum）を 開催。現在、新作映画『La Vie Cinématique 映画的人生』（2026年完成予定）、ノンフィクション『リキッド・アマゾニア』（2025年完成予定）の創作に取り組んでいる。

ソウダルア
Rua SODA

出張料理人、現代美食家。全国でその土地の素材のみを扱い、風土と歴史が交差する料理を和紙の上に表現する。また芸術祭でのレストランプロデュース、食による地方創生、フードエッセイの連載、映画出演など活動は多岐にわたる。大地の芸術祭（2015）、瀬戸内国際芸術祭（2016）、映画『もったいないキッチン』出演（2020）、東京・麻布にて7ヵ月の食とアートの実験場 Seven主宰（ 2021）、2023年に墨田区京島でアートセンター トリップ立ち上げ、ウクライナでのドキュメンタリー映画製作、2024年東京ビエンナーレ出演、すみだ向島EXPOのコンセプターに就任、映像作品『香川県 父母ケ浜 2018〈春、海、夕日〉』（2023）など。

ジャン＝ルイ・トルナトール
Jean-Louis TORNATORE

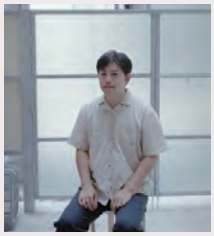
© lundimatin

人類学者。ブルゴーニュ・ヨーロッパ大学名誉教授、学際的研究ラボ「社会ー感受性ーケア」のメンバー。人新世の現状において、遺産というカテゴリーの解体を行う。現在は、トランス状態や反資本主義、反植民地主義、非採掘主義の視点を通して知識の生態学に関心を持つ。

占部まり
Marie UZAWA URABE

宇沢国際学館代表取締役・内科医。シカゴで宇沢弘文の長女として生まれる。1990年東京慈恵会医科大学卒業。1992-94年メイヨークリニックのポストドクトラルリサーチフェロー。地域医療のかたわら宇沢弘文の理論を伝える活動をしている。2015年3月国連大学で国際追悼シンポジウム、2019年日経SDGsフォーラム共催『社会的共通資本と森林』『社会的共通資本と医療』を開催。2022年京都大学 人と社会の未来研究院に設立された社会的共通資本と未来寄付研究部門の企画運営も行う。安寧社会共創イニシアチブ理事、日本医師会国際保健検討委員、JMA-WMA Junior Doctors Network アドバイザー。

大村高広
Takahiro OHMURA



1991年生まれ。博士（工学）。2023年より茨城大学応用理工学野都市システム工学領域助教。建築設計、研究、批評・執筆活動、芸術作品の制作を通して、都市化以降の―郊外あるいは後背地での―生の持続を支え励ます共同の可能性とそこでの建築の新たな必然性の位置を検討している。主な仕事に「新宿ホワイトハウスの庭」（改修、2021）、「記録の庭」（2022-）、「上大岡の衝立」（改修、2022）等。「倉賀野駅前の別棟」（齋藤直紀と共同）でSDレビュー 2019入選・奨励賞。2025年第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示「IN-BETWEEN（中立点）―生成AIと未来」に出展。

奥野克巳
Katsumi OKUNO

人類学者。立教大学異文化コミュニケーション学部教授。マレーシア・サラワク州（ボルネオ島）の狩猟民プナンのフィールドワーク。著作に『ひっくり返す人類学』、『はじめての人類学』、『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』など。訳書（共訳書）に、ティム・インゴルドの『人類学とは何か』『応答し、つづけよ。』『世代とは何か』がある。

太田 旭
Asahi OTA

一般社団法人オルスタ代表理事、国際栄養士。日本を拠点にアフリカ・アジア・中南米で活動。文化や価値観、地域性を考慮した「豊かさ」の探求や共創を行うほか、教育機関や臨床機関との共同研究政府や国連機関との社会実装、政策提言を行う。2019年（一社）オルスタを設立し代表理事に、2020年太陽グループ（株）社長室のサステイナブル関連事業を担当、2022年ヘルスケア領域における若手支援プログラムVisionHackerAssociation総括、2023年公益財団法人葉田財団理事、子どもの未来助成事業選考委員に就任。2024年に『異文化に身を置くすべての人へ ～国際栄養士のノート～』を出版。

鈴木ヒラク
Hiraku SUZUKI

1978年生まれ。絵と言語の関係性を主題に、平面・彫刻・映像・パフォーマンス等によりドローイングの概念を拡張する制作活動を展開している。主な個展に『今日の発掘』群馬県立近代美術館（2023）、また金沢21世紀美術館 (2009)、森美術館 (2010)、銀川現代美術館 (中国、2016)、MOCO Panacée (フランス、2019)、東京都現代美術館 (2019)など国内外の美術館で多数の展覧会に参加、音楽家や詩人らとのコラボレーションやパブリックアートも手がける。著書に『ドローイング　点・線・面からチューブへ』(2023)などがある。

卯城竜太
Ryuta USHIRO

© Minami Asami

アーティストコレクティブ Chim↑Pom from Smappa!Group のメンバー。2005 年に東京で結成。社会問題やそのシステムに対して独特な視点から現代のリアルを提示、都市論などを展開する。国際的に活動を展開し、各国の国際展、ビエンナーレに参加。グッゲンハイム美術館、ポンピドゥセンターなどにコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして活動を展開中。個人としては新宿のスペース WHITEHOUSE の運営や、歌舞伎町アートセンター構想委員会の他、秘匿性の高い展覧会「ダークアンデパンダン」のディレクション、執筆などを手掛けている。主著に『活動芸術論』（2022）など。

結城正美
Masami YUKI

専門はアメリカ文学、エコクリティシズム（環境文学研究）。ネヴァダ大学リノ校大学院に設置された世界初の「文学と環境」プログラムで学び、2000年にPh.D.取得。金沢大学教員を経て、2020年より青山学院大学文学部英米文学科教授。青学でのAGU環境人文学フォーラムの主宰等、環境人文学の発展に注力している。主な著書に『文学は地球を想像する―エコクリティシズムの挑戦』（2023）、訳書にD. エイブラム著『感応の呪文――〈人間以上の世界〉における知覚と言語』（2017）など。